

# Living the Lotus 2

*Buddhism in Everyday Life*

2025  
VOL. 233



## 立正佼成会サンアントニオ教会発足式 新たな門出に感謝と誓願を込めて

Living the Lotus  
Vol. 233 (February 2025)

【発行】立正佼成会 国際伝道部

〒166-8537

東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F

Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224

E-mail: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp

編集責任者: 赤川 恵一

編集チーフ: 三川 紗知

校閲者: 小坂 和正、菊池 克之

編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教)というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

未来を育てる  
庭野日鑑  
立正佼成会会長



「ガサガサした世の中」をつくっているのは……

いきなりで恐縮ですが、みなさんに一つお尋ねします。

いま目の前にミカンが三つあるとして、それをふたりで分けるとしたら、どのようにされるでしょうか。

これは本で知った話ですが、ある学校の先生が二人の生徒にミカンを三つ渡し、「どう分けたいか」と聞いたところ、一人が「一つを仏さんにお供えして、一つずつ分ける」と答えると、その先生は「何をいっている。一つ半ずつ分けるのだ」と、それを頭から否定したというのです。

たしかに算数の問題ではそれが正解ですが、児童文学者の花岡大学さんは、吉岡たすくさん（児童文化研究者）との対談でこの話をまじえながら、幼児教育と宗教的情操の大切さとともに、人知を超えた存在を「拝む世界をもっていないこと」が、人の心に潤いと余裕のない「ガサガサした世の中になった大きな原因」とおっしゃっています。

最近では、給食を食べるとき「うちの子に、いただきますといわせないでほしい」と申し入れるお母さんがいると、遺伝子工学の権威として知られた村上和雄さんのご著書にありました。給食費を払っているから、というのがその理由です。

しかし、みなさんもお存じのように、『いただきます』は、自分の命のために、他の生物の命を『いただいている』ことを、食事のたびに意識し、感謝する言葉（村上和雄）です。あらゆる命をはぐくむ大自然、そして神仏、さらには食

卓に食物を届けてくださる多くの方への感謝の意味をこめた言葉であり、それはつまり「拝む心」のあらわれです。

そのことを忘れて、<sup>こうり</sup>功利や合理性だけを見る親や大人の心や態度が、次代を担う人たちの心に大きく影響することが心配でならないのは、私だけではないでしょう。

### 未来は「いま・ここ」にある

ただ、私はこう思うのです。日本では多くの方が正月になると神社や寺院に詣でますし、お彼岸がくればお墓参りをし、お盆には先祖の御霊<sup>みたま</sup>をお迎えして手を合わせます。また、日本には神道も仏教も「論語」を中心とする儒教も浸透<sup>しんとう</sup>していれば、西洋の習俗<sup>しゅうぞく</sup>も受け入れるといった具合に、私たちは情操を豊かにする教えを数多くいただき、学び、それらを調和させながら歴史を刻んできたのです。

もちろん日本だけでなく、<sup>とうと</sup>尊いものを拝む宗教文化はどの国にもあります。つまり、人間にはみな拝む心が具<sup>そな</sup>わっているといえるのです。であれば、そのことを忘れている人に拝む心を取り戻してもらい、子どもには尊いものを敬い拝む親や大人の生活実践の姿を見せていくことが大事です。毎日の読経供養<sup>どきょうくよう</sup>は、その大切な機会であります。

なぜなら、未来の出発点は「いま」だからです。いま・ここで私たちが心を磨き、できることを精いっぱい実践することが、次代を担う子や孫の心を育て、みんながお互いの仏性<sup>ぶつしょう</sup>を信じあえる「未来を育てる」ことになるのです。見方を変えると、私たちが成長し向上すればするほど、より明るい未来が築かれるということです。

ちなみに幼児教育についていえば、親が日々、神仏に手を合わせ、<sup>なご</sup>和やかで心安らぐ家庭にすることが何よりの教育になります。識者<sup>たいきょう</sup>が胎教の重要性を説くのも、母親の心の安定が胎児に好影響を与え、親子の絆<sup>きずな</sup>も深まるからです。

そこで、たとえば、家庭に安らぎをもたらすという意味でも——「有り難う」「いただきます」「ごちそうさま」の三つの言葉それぞれの意味をあらためてかみしめ、心をこめて日々、口にする習慣を大切にしていきましょう。そうした親や大人の後ろ姿<sup>うしろ</sup>が未来を生きる人の心を涵し、育てるのですから。

(『佼成』2025年2月号)



## 自分が幸せになるには 人の幸せを祈り、人のために尽くすこと

ブラジル教会 郡司・三角・エリカ

立正佼成会には、いつごろ、どのようなきっかけで入会されたのですか？

30年ぐらい前、父に連れられて、立正佼成会のブラジル教会に行ったことが入会のきっかけです。その頃、ブラジル教会では社会活動の一環として、道場を開放して子どもたちの喘息治療を行っていました。サンパウロには大気汚染の影響で喘息で苦しんでいる子どもが非常に多く、0歳～13歳の子どもたちを対象にして頸椎のマッサージ治療を行なっているんで



昨年の12月8日、ブラジル教会の成道会式典で説法をする郡司さん

す。整体師の父は佼成会の会員ではなかったのですが、同じ整体師グループの先生たちと一緒に道場で整体治療のボランティアをしていたのです。

その頃、私は心の支えになる宗教を求めています。立正佼成会とご縁を結び、法華經の教えに出会ったのは本当に仏さまのお導きだと思っています。もちろん最初のうちは知っている人がいませんでしたので、私は教会に行くのがとても不安でした。でも、現在の佐々木マリア浩身教会長さんが、すでに青年部リーダーとして活躍されていて、いつも明るい笑顔で私を温かく迎えてくださったのです。そのお陰で、私は少しずつ青年部活動に参加するようになりました。年齢が私と近いということもありましたが、当時の私にとって佐々木教会長さんは青年部のリーダーとして最も尊敬できる人であり、とても心強い存在でした。

青年期に宗教を求めていたのには何か理由があったのですか？

私には1歳下の妹がいたんですが8歳の時、交通事故で亡くなってしまったのです。愛する妹を失った私は、その大きな精神的ショックと悲しみを青年期になってもずっとトラウマとして抱えていて、本当につらい毎日を送っていました。子どもの頃、よく妹と一緒に楽しく遊んだことをふと思い出すと、悲しい気持ちになり、自然に涙が出てしまうこともしばしばでし

た。ですから、心の拠り所となる立正佼成会の信仰に出会い、先祖供養の尊さや大切さを学び、朝夕、ご宝前に向かってご供養をさせていただけることがとても有り難かったですね。当初、私は『経典』に書かれていることの意味がわかりませんでしたけれども、幹部さんから法華経の功德が三角家のご先祖さまや祖父母、そして事故死した妹に回向されることを教えていただき、一生懸命にお経を上げました。そして、毎日ご供養を続けていくうちにいつしか私の心は安らぎ、悲しみも癒され、長年にわたって苦しめられていたトラウマを克服することができたのです。

### 昨年10月に教師資格を授与されましたが、現在の心境を聞かせてください。

今までは、ともすれば自分の悩みを解決するために仏教や法華経を勉強してきたように思います。しかし、教師資格を拝受させていただいたことで、これからは自分の人格の向上を目指すと同時に、もう一歩進めて人さまの幸せを願って、この尊い仏さまの教えを伝え、教えから得られた幸せを多くの人に味わっていただきたいと思うようになりました。この気持ちを単なる言葉ではなく、今後の行動や後ろ姿で示していくことを、大聖堂で教師資格を感謝の気持ちで拝受した時、私はご本仏さまに誓願させていただきました。

### 法華経の中で心に刻んでいる教えはありますか？

法華経の勉強をさせていただいて、特に薬草論品の「三草二木の譬え」が印象深く心に残っ



昨年の3月10日、教団創立86周年記念式典で通訳のお役を務める郡司さん（左）

ています。この世界には大小さまざまな草や木があって不平等のように見えますが、すべての草木が雨を受け、成長しているという点においては平等という内容が説かれています。そして形や性質、大小など表面上の違いはあっても、本来そこには優劣はなく、すべてが尊い存在であることを教えてくれています。私たちの身近にもいろいろと違う個性を持っている人たちがいますが、一人ひとりかけがえのない素晴らしい仏性を持っていて、みんな尊い存在であることを教えてくれている譬えに感動しました。

### 立正佼成会の教えの中で大切にしている教えはありますか？

立正佼成会では日ごろ、「自分が変われば相手が変わる」と教えてくださっています。世間一般では自分が変わることも相手を変えようとしませんが、現実には人を変えることはできません。私自身も以前、義姉との軋轢があって悩んだ経験があり、最初は何かして義姉のことを変えようとしていました。ところが、その後、佼成会で「まず自分が変わる」ということ

を教えてください、実践したことで義姉との関係が改善して今ではとても仲良しになり、この教えに本当に感謝しています。

**立正佼成会のどういうところに魅力を感じていますか？**

いちばんの魅力は「まず人さま」の心で菩薩行を実践していることです。今まで法華経の教えを学び、自分が本当に幸せになるためには人の幸せを祈り、人のために尽くすことが大切と教えていただきました。それは言い換えれば、教えによって自らが菩薩となって精進することだと思います。人さまの幸せを願って菩薩行を実践することで自らが成長し、自らが成長することでさらに人さまのために菩薩行を実践できる自分にならせていただく。「まず人さま」の心を、私はそのように受け止めています。

**最後に今、願っていること、これからの修行目標を聞かせてください。**

今年はブラジル教会の皆さんが待望していたポルトガル語版の『法華三部経』が、いよいよ出版される予定です。その意義ある年にあたり、まだまだ非力な私ですがサンガの皆さんと力を合わせて、佐々木教会長さんを少しでも支えられる自分になれるよう精進していきたいと思っています。現在、私はサンパウロ支部で主任のお役をいただいております、これからも地区の会員さんたちと心をひとつにして、さらに布教活動に取り組んでいくつもりです。また、教会の式典や行事などの時、開祖さま、会長先生のお言葉をポルトガル語に通訳するお役をとおして、一人でも多くのブラジルの人々に法華経の教えを伝えられるよう力を尽くしていきたいと心から願っています。



ご主人と二人の娘さん、そして愛犬と

## 開祖さま生誕会

11月15日は開祖さま生誕会が行なわれる日です。  
開祖さまは1906年（明治39年）11月15日、新潟県十日町市菅沼で生まれました。東京に出てから法華経に出会い、法華経をもとに人びとを救い、世の中を立て直すために、立正佼成会を創立しました。

私たちは開祖さまのおかげで法華経と出会い、幸せな道を歩むことができます。

生誕会は、開祖さまのみ心をかみしめ、報恩感謝を新たにする日です。



### 豆知識

仏教には「和顔愛語」という言葉がある。なごやかな顔と愛情のこもった言葉を交わすことを意味している。明るい笑顔とあたたかい言葉で人や社会を明るくした開祖さまは、まさに和顔愛語の人だった。



『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。  
<https://www.koseishop.com/>

## 布薩の日・ご命日

布薩の日とは、半月に一度（毎月1日と15日）、日ごろの修行をふり返り、喜びや反省を仲間とともに話し合う日です。そして、教えを広める決意を新たにすることもできます。

ご命日は、仏さまの教えをいただいたことに感謝し、人びとにも伝え広めていくという誓いを新たにします。立正佼成会のご命日には次の日があります。

1日 朔日参り（布薩の日）＝会長先生の法話をかみしめ、その月の信仰生活の指針とするとともに、一カ月の誓願を立てる。

4日 開祖さまご命日＝開祖さまをおしたいし、「追慕・讃歎・報恩感謝・継承・誓願」の精神を新たにします。

10日 脇祖さまご命日＝脇祖さまが示された慈悲の精神を手本として生きることを誓う。

15日 釈迦牟尼仏ご命日（布薩の日）＝私たちに救いの道を示してくださったお釈迦さまへの報恩感謝の心をささげる日。また、「朔日参り」で立てた誓願をふり返り、半月間の修行を反省するとともに、次の半月の実践への決意を新たにします。



### ◎ 豆知識

「命日」とは人が亡くなった日のこと。ご命日には、その人の好きだったものを仏前にお供えするなど、心からの供養をする。立正佼成会では、ご本尊勧請の日などの仏縁をいただいた日もご命日という。





世界を大きなサンガとしよう  
法華経の信者は多宝如来  
立正佼成会開祖 庭野日敬



ですから、信仰することで得られた功德をまわりの人に話すことのできる人は、とりもなおさず「多宝如来」にほかなりません。

日蓮聖人が佐渡に流罪になったとき、その地の念仏者・阿仏房は、ご聖人のことを阿弥陀如来の怨敵であるとして、斬り殺そうと思っていました。ところが、ご聖人の人格と識見に敬服して、夫婦ともども弟子になったのでした。

その阿仏房が、「多宝如来涌現の宝塔はどんなことを意味しているのでしょうか」と手紙で質問したのに対して、日蓮聖人はこう答えておられます。

「末法に入って法華経を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり。(中略)南無妙法蓮華経と唱うる者は、我が身宝塔にして我が身又多宝如来なり。妙法蓮華経より外に宝塔なきなり。(中略)然れば阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、此れより外の才覚無益なり」(「阿仏房御書」)

この「此れより外の才覚無益なり」という一句、まことに信仰の究極を突いた重み

のある言葉です。才覚(世間的な才知や学問)などは無用である。素直な、真心からの信仰こそが大事なのだ、というのです。

立正佼成会のみなさんは、法華經にご縁をいただいた人であり、朝夕に「南無妙法蓮華經」を唱えている人ですから、みんな「多宝如来」なのです。お釈迦さまと半座を分かって並んで座れるほどの人なのです。そうした自覚をもっていただきたい。それは増上慢ではありません。当然の自負なのです。

「長者窮子のたとえ」で、窮子が究極の救いに達するのに二十年もかかったのは、そうした自覚・自負がなかったからです。長者(仏さま)のほうでは、わざわざ汚れた身なりをして窮子に近づいていきます。そして「これからは親子のようにしよう」とまでいてくれるのです。それなのに窮子は、やはり自分を「愚かな人間」と思いこんでいたのです。

みなさんも、これまでは自分を「窮子」と思いこんでおられたかもしれません。けれども、法華經を知ったからには、もはや「窮子」ではありません。仏さまの実子であり、後継ぎなのです。その真実をもう一度かみしめ直してみてください。まことに、これよりほかの才覚は無益なのです。

庭野日敬平成法話集 1『菩提の萌を発さしむ』P.67-68



## 初春に思うこと

国際伝道部長  
赤川 恵一

みなさま、こんにちは。1月20日に始まった寒中読誦修行も無事に終了し、日本では2月3日の「立春」を境に、暦のうえでは春を迎えました。東京はまだ寒い日が続いていますが、各地からは春の訪れを告げる梅の開花の便りがちらほらと届いております。毎日の通勤途中で目にする風景や風の音にも、季節の微妙な変化が感じられ、冬の間眠っていた生命が徐々に活気を取り戻しつつある様子に、とても嬉しい気持ちになります。春本番もうすぐです。

さて、2月には仏教の三大行事の一つである「涅槃会」がございます。校成会でも大聖堂にて盛大に式典が執り行なわれます。釈尊のご入滅の意義をかみしめながら、新たに在家仏教徒としての日々の精進をお誓いしたいと思います。

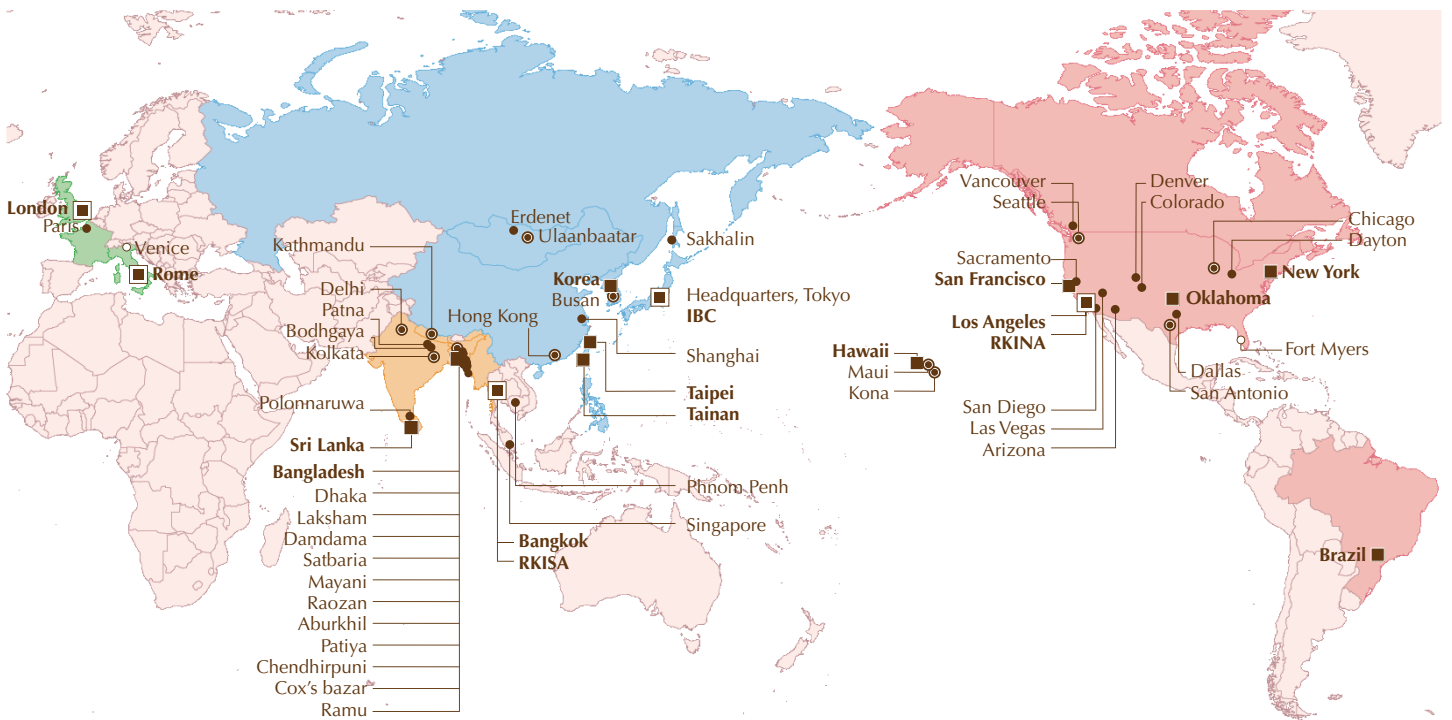
今月の会長先生のご法話では、「私たちが成長・向上すればするほど、より明るい未来が築かれる」と教えていただいております。そのためにも、法華経をいかに生きていくかを考え、ご法によって幸せを実現していくために、日々の生活の中でみ教えを身口意で唱えながら、已年にちなんで昨年の自分から脱皮してまいりたいと願っております。



昨年12月8日、サンアントニオ教会発足式のあと、献灯のお役を務めた参加者と



🌸 *A Global Buddhist Movement* 🌸



Information about  
local Dharma centers



facebook



X

